

# やまなしGAP認証にむけた 現地審査体制の整備と指導力強化

活動期間：平成28年度～（継続中）

農業の持続可能性を確保するための取り組みである「GAP」の導入が注目されている中で、県では独自の制度である「やまなしGAP認証制度」を創設し、認証に向けた取り組みを強化。これを受け、多くの農家をGAPの認証に導くために、普及組織が中心となって農家指導を行った結果、認証取得者数は、初年度から目標を大きく上回る31件となった。

## 具体的な成果

- 普及指導員、営農指導員の意識変化  
・難しい、面倒というネガティブなイメージを持つことが多いGAPであるが、研修等を通じ、GAPの意義や必要性について十分理解が進んだ。
- 農家の意識変化  
・これを受け、農家においても、普及指導員等の指導を通じ、経営の工夫や改善の手段としてGAP取得に意欲を示す事例が増加した。
- 初年度のやまなしGAP認証数  
・初年度は31件の農家が認証を取得した。  
・31件の多くは個人農家であるが、一部で農協の部会組織も含まれ、この中には出荷箱にマークを印刷するなど、認証制度をブランド強化に活用した事例もある。

## ○認証取得者の内訳

形態別 個別26件、団体5件  
作目別 果樹17、野菜12、水稲1、その他7



普及指導のシミュレーション

## 普及指導員の活動

### 平成29年度

- 現地指導体制の整備・強化  
・普及として共通認識を持つための全普及員を対象とした基礎研修の実施。  
・革新支援専門員を核とした専門チームの結成。

### ○GAP担当普及指導員の資質向上

- ・机上及び現場での応用研修  
・現地審査を想定した実践研修  
・民間によるGAP研修の受講

### ○農協営農指導員との連携

- ・普及指導員との合同研修の実施  
・JA組合員、部会組織等に対する指導連携、積極的な掘り起こし。

## 普及指導員（農業革新支援専門員）だからできたこと

・GAP指導が未経験であっても、職員の多くは農家の指導経験が豊富であり、県内研修や国の研修、ekネットを通じた事例収集等により、効率的な推進が可能であった。

・部会組織への対応においては、普及のコーディネート機能を生かした活動により、意見の異なる農家をまとめ上げ、認証まで誘導できた。

## 山梨県

### やまなしGAP認証にむけた現地審査体制の整備と指導力強化

活動期間：平成28年～32年

#### 1 活動の背景

山梨県では、県独自のGAP「やまなしGAP」を創設し、平成29年7月から認証制度を開始しました。本制度は2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の農産物調達基準を満たしていることから、県内の農家や生産団体、法人など多くの生産者がGAPに取り組み、認証取得に導くことが目標となります。

やまなしGAP認証に向けた現地審査や農家指導は、普及組織が中心となって行うことから、現地審査体制の整備や普及指導員の指導力強化が急務となっていました。

#### 2 活動の経過

農業技術課・農業革新支援スタッフ（農業革新支援専門員）として、本課題を重点プロジェクトに位置づけ以下の取り組みを行いました。

##### (1) 認証分野の拡大

「やまなしGAP」は、平成29年7月に「水稻」「果樹・野菜」を対象分野として制度を開始しました。その後、新たに「その他作物（食用）」「茶」「麦」が農水省共通基盤ガイドラインの準拠確認を経て、畜産物と林産物を除くすべての分野で、認証可能となりました。

##### (2) 現地審査体制の整備

平成28年と29年にJGAP審査員研修に参加した計10名の普及指導員を主体とした現地審査班を整備しました。「やまなしGAP」の現地審査事務局である農業技術課革新支援スタッフを審査班長とし、認証申請をした当該普及センターを除いた各普及指導員による班体制（おおよそ2名×3班）を作りました。本体制で、農家、生産団体、法人など、調査に必要な抽出戸数に応じた現地審査を行いました。

##### (3) 普及指導員およびJA営農指導員のGAP研修

はじめに、現地審査に携わる普及指導員を参集し、机上および現場を利用して、チェックシートや審査書を用いた実践的な研修を行いました。ここでは、審査時に想定される疑問点や判断基準など、互いに共通認識ができるよう議論を深め、審査書の改良や審査時の注意事項などをまとめて準備を整えました。

次に、日頃の普及活動の中で、GAPの理解促進とともに、皆がGAPの指導をできるように、普及職員全体を対象とした研修を行いました。また、JA中央会と共同でJA営農指導員を対象とした研修会を開催しました。研修内容は、いずれもGAPの種類や意義、実際の現地審査を想定して、審査役と農家役による演習などを行いました。研修会は、平成29年7月～30年1月まで計5回行い、約200名が参加しました。県下の普及指導員の95%、営農指導員の70%以上が参加し、平成29年度の後半期には、GAPの意義や取り組みの重要性が浸透してきました。

### 3 活動の成果

#### (1) 初年度のやまなしGAP認証数

平成29年10月の第1回認証審査会において、JAフルーツ山梨春日居支所の果実部会と都留市で多品目野菜を生産している佐藤ファームがそれぞれ認証され、「やまなしGAP」の認証1号と2号になりました。また、平成30年1月に行われた第2回認証審査会では、12件の個人・団体・法人（認証数14）が、3月の第3回認証審査会では17件（認証数21）が新たに認証されました。

平成29年度の認証目標値は、2～3件（取り組み数20）でしたが、現場指導の努力により、31件（認証数37）を認証するまでに至りました。

#### (2) 指導者や農家の意識の変化

GAPというと、「難しい」「面倒」といったネガティブなイメージを持つことが多いですが、年間の活動を通じて、GAPの意義や必要性が指導者レベルで広がってきたように思われます。また、認証を受けた多くの生産者が、今後さらに工夫や改善を進めたいと意欲を示されていたことが印象的でした。



GAP研修の様子（現地審査デモ）



GAP研修の様子（資材庫・農機具管理）

### 4 農家等からの評価・コメント

現在までJA独自のGAPに取り組んでおり、部会員にもGAPが浸透してきました。今回、県GAPの認証を受け、より励みとなり、部会全体で、今後もしっかりとした管理をしていきたいと思いました。

### 5 普及指導員等のコメント

2020年の東京オリンピック大会の食料調達基準に、最低でも県認証GAPが位置づけられ、注目されています。また、現地指導の努力もあり、当初の目標を上回る認証がされました。オリンピックに捕らわれず、GAPの意義や必要性を説明し、GAPの精神の浸透、やまなしGAPの認証に取り組みたいです。

### 6 次年度の取り組み

平成29年度は、GAPの取り組みの下地があった農家、団体、法人などが主に認証を受けました。平成30年度は、新たにGAPに取り組み始めた生産部会などを中心に多くの認証が受けられるように、現場の指導力強化を図っていきます。